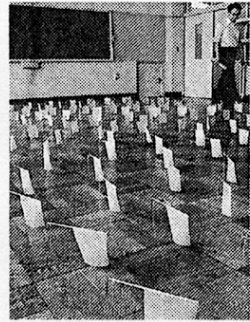


文化

芸術の新しい創造の場として、廃校が注目を集めている。美術の制作・展示会場や演劇の舞台、映画の撮影などに活用され、それを機に文化施設として生まれ変わるケースも出てきた。これらの試みは地域の活性化に役立ち、同時に従来の文化行政のあり方に、石を投じる格好ともなっている。

繁華街の東京・赤坂。そこに訪れたのである。角にある旧赤坂小学校は四年前の廃校以来、人影が途絶えていたが、今月中旬は活気にあふれていた。「日本・オランダ現代美術交流展」が開かれ、二週間の会期中に約五千人が鑑賞

音楽室や理科室、屋上などに大型のインスタレーションが展示され、随時さまざまなワークショップやシンポジウムも催された。この展覧会を企画したギャラリー・サー・代表の酒井信一は、児童生徒減少とドーナ



廃校になった小学校の教室を利用したフェリス・ヘスの作品（東京・港区の旧赤坂小学校）

全般の中核拠点をこころ名付けている。ただ新しく建物を建てるのではなく、廃校など役割を終えた既存の公共建築物を取り壊さず、活用する計画だ。「スクラップ・アンド・ビルドが文化行政のすべてではない。財政事情も考慮

残っている。ニュートラルな美術館と異なり、具体性を帯びた場の雰囲気も大きな魅力」と言う。今回、十人の出品作家は校内で制作をしたが、その特殊性が作家に刺激をもたらすというわけだ。逆に見る側にしても、自分の原体験を呼び覚ます環境の中で鑑賞することで、より身近に作品を感じることができると

特殊な空間 作家を刺激

廃校、芸術創造の場に

氏は廃校を会場に選んだ理由として、現代アート特有の大型でかつ実験的な作品を一帯に陳列できる広大なスペース、都心という立地条件の良さ、会場経費の安さなどを挙げる。また「教室には落書きのようになされた時の記憶が

ツ化現象によって市街地での学校の統合が相次いだ。九〇年代初頭からはじまり、既成の枠にしばられない現代美術や小劇場の関係者が目を向けた。映画の分野でも、小栗康平監督が昨年、故郷群馬県の中之家町立第四中学校の

般に無料で公開中。教育施設が文化施設として再生され、地域の財産となったといえよう。地域活性化に効果

「京都アーツセンター」(仮称)ー先週末とめた長期の芸術文化振興計画の中で、新たに設ける芸術

住民の理解が不可欠

文化行政に一石

「柔軟に学校を一つの器と考えて地域住民に開放できれば、学校教育、社会教育、そして家庭教育の場にもできる。そこに交流が生まれ、社会も芸術も豊かなものになっていく」今後、行政はどのような形で芸術に寄り添っていくのか。逆に、芸術は地社会にどんな成果をもたらすことができるのか。芸術分野における廃校利用はその試金石ともいえる。

文化部 坂本憲

を積極的に生かし、演劇、クラシック、狂言、舞踊、美術など幅広いジャンルの発表の場としている。また先月には地元的美術関係者の手で日本とフランスの現代アートを紹介する「共鳴する場へ」展が、中京区の旧立誠小学校をメイン会場に、周辺のギヤリも含めた広域的な形で実現。来月上旬には成安造形短大(長岡京市)の学生が同校でファッションショーを開くなど、廃校が使用可能となったことで芸術活動がより高まっているが、京都市はさらに踏み込んだ構想を描いている。

「京都アーツセンター」(仮称)ー先週末とめた長期の芸術文化振興計画の中で、新たに設ける芸術

利用断る自治体も だが、公的施設利用の舞台裏を探ると、複雑な実情も浮かぶ。その一つが歴史や思い出の詰まった学校を興行目的に使うことに対する住民のよまごい、反発だ。二年前、大阪・梅田の廃校で演劇公演が行われた際には元PTA会

に東京の杉並区立和泉中学校で「学校美術館構想」と銘打って、現代美術展が開かれたことがある。これを計画した同区立済美教育研究所所員で現代アーティストの村上タカシ氏(当時同校教諭)はこう語る。「柔軟に学校を一つの器と考えて地域住民に開放できれば、学校教育、社会教育、そして家庭教育の場にもできる。そこに交流が生まれ、社会も芸術も豊かなものになっていく」